

場面緘黙の子どもたちは質問されると不安になりますが、いつも質問を避けて通るわけにはいきません。症状改善の途上で「質問に答える練習ができるようになる段階」にいつか至るはずですが。子どもの不安を高めずに答えやすい質問をするにはどのような問い方がよいのでしょうか。また、どのような工夫が必要でしょうか。

【第1段階：間接的な質問】

初めは直接子どもに質問せずに間接的な質問を行います。子どもに返答を求めず、プレッシャーをかけないようにしましょう。そうするだけで答えられる子どももいます。例えば「〇ちゃんはオレンジジュースが欲しいのかなあ。それともリンゴジュースが欲しいのかなあ」というように、「…なのかなあ」という言い方をするといいでしょう。子どもの方を見ず、おもちゃや他の人の方を見て、つぶやくように言ってみてください。

場面緘黙の子どもは自分への質問よりも、兄弟に質問された問いに答えやすいようです。実際、うちの娘は、弟にされた質問に横からよく答えます。人の会話に割りこむのは失礼なことだと教えているのですが。この方法を、他の場面で応用できることもあります。例えば、お世話になっている医師に「娘に答えさせたいときは、弟に向かって質問してみてくださいませんか。弟の代わりに娘が答えるかもしれません」とお願いし、それでうまくいったことがありました。いつも使えるわけではありませんが、不安が高まりそうな場面でプレッシャーを取り除いたり、みんなで自然におしゃべりする雰囲気にしたりに役立つと思います。

【第2段階：ハイ/イエで答えられる質問】

全く話せない子に対しては、ジェスチャーでも答えられる「ハイ/イエ型の質問」を行います（声を発して答えられる子どもには、普通はこのタイプの質問を避けたほうがよいでしょう。場面緘黙の子どもたちは声を出さずに、うなずきや首振りなどで答えてしまうからです。全く話せていない子に発話を促す過程で、このタイプの質問をすることに問題はありません。）

日本語の場合、例えば「～ではないの？」など否定形の質問は返答に迷います。ハイかイエを求める質問では肯定形で質問をするようにしましょう。どちらか決められないときは、「こんなふうに首をかしげてね」とジェスチャーを示したり「『わからない』と言ってね」と言葉のモデルを示したりすることが有効なことがあります。

【第3段階：選択肢のある質問】

不安が高まると、頭の中であれこれ考えることが難しい子どももいます。選択肢を示して質問しあげると、ストレスをぐんと減らすことができます。選択肢を2～3個示してあげましょう。例えば「青いマーカが欲しい？それとも赤いマーカ？」と問います。どちらでもないことがありそうなら、選択肢に「それか、他のがいい？」と付け加えましょう。

ほとんどの質問は「選択肢がある質問」に言い換えることができます。例えば、第2段階の「ハイ/イエの質問」を言い換えることができます。「あなたは1年生ですか？」と聞く代わりに「あな

たは1年生?それとも2年生?」と聞けますし、「もう帰ろうか?」と聞く代わりに「もう帰る?それとも、もう少しここにいたい?」と聞くことができます。このタイプの質問は、もっともよく用いられます。

【第4段階：オープン型の質問】

「オープン型の質問」は、選択肢がなく、子どもが思いついた言葉を話すよう求める質問です。このタイプの質問に余裕をなくしてしまう子どもは多いようです。「選択肢のある質問」に答えられるようになってから「オープン型の質問」にチャレンジさせましょう。もしも子どもが「オープン型の質問」に答えられないときは、「選択肢のある質問」に言い換えます。

■ 4つの段階の質問例：【間接】 < 【ハイ/イエ】 < 【選択肢あり】 < 【オープン型】

- 1) 間接：○さんは何のゲームがしたいのかなあ。
- 2) ハイ/イエ：ババ抜きがしたい?
- 3) 選択肢あり：ババ抜きをしたい?それか神経衰弱?それとも他がいい?
- 4) オープン型：今日は何のゲームがしたいですか?

- 1) 間接：○くんは夏休みにキャンプに行ったのかなあ。
- 2) ハイ/イエ：夏休みにキャンプに行った?
- 3) 選択肢あり：夏休みのキャンプって、海に行ったの?山に行ったの?
- 4) オープン型：夏休みのキャンプはどうだった?

「何・いつ・誰・どこ」を問う質問の方が、「どんな・どうして」を問う質問よりも答えやすいことが多いです。また、子どもによっては「事実に関する質問」の方が「気持ちを聞かれる質問」よりも答えやすいことが多く、「中立的な事柄についての質問」「ポジティブな事柄についての質問」の方が「ネガティブな事柄についての質問」よりも答えやすいことが多いです。

■ 質問例：【A：何・いつ・誰・どこ】 < 【B：どんな・どうして】：ドラえもんが好きな子編

- A) ドラえもんって、犬だっけ、猫だっけ?
- A) ドラえもんのひみつ道具って何があった?
- B) 昨日のテレビのドラえもんはどんなお話だった?
- B) どうしてドラえもんが好きなの?

■ 質問例：【A:事実に関する質問】 < 【B:気持ちを聞く質問】：クラスの係編

- A) 今なんの係をしているの?
- B) なんの係をしたいですか?

■質問例：【A：中立的な事柄についての質問・ポジティブな事柄についての質問】

＜【B:ネガティブな事柄についての質問】：給食編

- A) 今日の給食は何だった？
- A) 給食で好きなものは何ですか？
- B) 給食で食べれないものは何ですか？

【質問の仕方のヒント】

- 質問をしてから、5秒程度は返答を待ちましょう。
もしも答えなければもう一度質問し、さらに5秒待ちます。
それでも返答がない場合は、より簡単な質問のタイプに言い換えましょう
(（4）オープン型質問→（3）選択肢あり質問→（2）ハイ/イエ型質問)。
- 質問するときに、子どもの目を見ないようにしましょう。直接アイコンタクトをとると、子どもの緊張が高まります。
- 子どもが話した時は、子どもの言葉を繰り返し、好意的な言葉をかけて、発話を強化します。例：
「1年生なのね。教えてくれてありがとう」
- 子どもが答えたときに大げさに喜んではいけません。他の人が話したときと同じように普通にふるまってください。
- 質問に直接答えられない場合でも、友達や親を介してなら答えられることがあります。親や友達が子どもに質問を繰り返し、あなたがいるところで親や友達に向かって答えるようにします。「答える声を人に聴かれる」ステップが難しい場合は「ひそひそ声や姿をかくして質問に答え、友達や親に代弁してもらう」ステップから始めます。
- 集団での場では、全体の場で質問して答えてもらうのではなく、その子と1対1で話す方が答えやすいでしょう。
- 人形やおもちゃをパペットのように用いると、発話できやすい子どももいます。
- 子どもが十分リラックスしているか、人や状況に緊張していないかをよく確認してから、子どもに質問しましょう。すでに話せていた場面で何も答えないままにしておくと、「質問に答えるのを避ける行動」を強化してしまいます。答えられなかったときは、子どもの緊張が下がったらもう一度同じ質問を試みましょう。
- その子が話す力を持っていること、いつかきっと話せるようになることを、子どもに伝えてあげましょう。何度か質問しても答えられない時は「なんて答えようかいろいろ考えてくれているのが分かるよ。いつかきっと伝えるのが平気になる。いっしょにやっついこうね」と言うようにしましょう。

JaNae Haycock (2018) “How to Ask a Question to a Child with Selective Mutism”

<https://strivingtospeak.files.wordpress.com/2018/07/how-to-ask-a-question-to-a-child-with-selective-mutism2.pdf> (翻訳を一部修正加筆・HP掲載について著者に了承済)

かんもくネット <http://kanmoku.org/> (2018年11月公開)